

放鳥ツルもそろって8羽 北帰行

3月27日9時50分、7羽の渡来ツルと1羽の放鳥ツル8羽がシベリアへ向けて旅立ちました。渡去が遅くなるのを心配していましたが、やはり1日だけですが昨年度より早く、みんな無事に北帰行しました。放鳥ツルは過去3回とも渡来ツルとは別行動をとりましたが、今回初めて仲良しのツルと一緒に飛び成功しました。来シーズンにはペアで元気な姿を見せて欲しいです。

今年度を振り返ってみますと、第一陣は11月2日に4羽1家族、次を待っていると12月27日にやっと1羽渡来しました。12月1日に放鳥した1羽と仲良くなり、来シーズンはつがいになって来ればよいと願っています。その後思いがけず平成年度になって初めての3月の飛来、4羽でしたが翌日2羽飛去し、渡来数は7羽（成長5、幼鳥2）になりました。

今年は前年度を3羽上回り、来シーズンに期待が持てる年になりました。

ツル保護研究員 河村宜樹



写真 竹林賢二さん提供

6・6・9・6・6・6・96・6・9・6・6・6・96・6・9・6・6・6・96・6・9・6・6・6・9 漫画家 なかはらかせむ から 八代へのメッセージ! No.14

3月になり大雪が降った次の日夕方、雪が連れてきてくれたかのように4羽のナベツルがやって来た。そのうち2羽は一泊して再び大陸をめざしたが、しかし、その日のねぐら入りと翌朝の給餌田入りの時に先の4羽家族との見事な8羽の編隊飛行を見せてくれた。ゆるやかに風にのり優雅に旋回し、夕焼けを背景に二所神社をかすめて飛ぶ8羽のなんと美しいことか！ボクたちにはこの風景をまもる責任があると実感した。



創刊30号を記念して

ナベヅル環境保護協会 会長 西岡 武美

「ツルの里だより」が創刊されて12年の歳月が流れて参りました。

本州で唯一のナベヅルの越冬地からの情報誌として、関係機関を始め地域との絆を深めつつ、ナベヅルの保護活動の深みと大きさを感じているところであります。

「ツルの里だより」を読まれて皆様方もいろいろと感じられておいでのことと思います。

私はこの12年間で強く印象づけられたこと3点を、私が思うままに振り返ってみたいと思います。

第一点は「保護ヅル」の移送事業です。鹿児島出水市の皆様方の深いご理解のもと、鹿児島県ツル保護会の方々の将来を見据えられたご英断あつてのことではありますが、世界初のこの事業が実現したものと思ひ、改めてここに深甚なる敬意と感謝の誠を捧げたいと思います。

世界で初めての人工移動によって、減少の一途をたどる山口県周南市での越冬数増羽プログラムの幕開けでもありました。リスクの高いこの事業には、根気と忍耐を、そして最大にして細心の気配が必要だと思われれます。

地元は勿論のこと、国と県同志や出水市と周南市との深い共通認識の上で、理解を深め乍らお互いの信頼関係を前進し続け辛抱強く繰り返し、自然との調和を見付け出すことが大事なことではないかと思われれます。この事業で何よりも大切なことは保護ヅ

ルが完全に元気な姿で飛翔出来ることが大前提であることはいうまでもありません。特に、ナベヅルは神経質な鳥だといわれております。ツルの習性にマッチした方法を創造し続けなければならないと思われれます。今年放鳥されたツルは、換羽をして元気に復調された姿で八代の里への馴化に頑張っているように思っています。そこへ12月27日、突然1羽のツルが飛来して参りましたことは皆様ご案内の通りです。その1羽のツルと仲良く餌を食べたり、ねぐらと一緒に帰ったりして協同生活を始めた様子がかがえます。このことは、今後の大きな一つの指針であるかもしれません。願わくば、北帰行を共にして、再度飛来してくれることを強く望んでいるところでございます。

二点目は、昨年10月に出水市で行われました、「第4回生きものと人、共生を考える」会議が盛会裡に終了したことです。初回は周南市で始まり、第2回目は新潟県佐渡市で、「トキ」と人との共生に向けての取り組みを共感することができ、第3回目の兵庫県豊岡市では、「コウノトリ」の野生復帰への永年に亘る強い熱意とその取り組みの深さ、大きさと、自然との共生への必然性を痛感させられました。そのことは1つの指標として、減少の一途をたどる本州唯一のナベヅルの越冬地での環境の整備と保全に、一層の勇気と元気を戴き、地域をあげて一致協力して取り組むべき課題の共有化を図ることの重要性を再認識する場となりました。出水市のこの会議では、万羽ヅルの飛来する環境の保全の取り組みの姿は、雄大な地域の形態と、ツルへの永年に亘る愛情を感じると共に、自然との共生の難しさも実感致しました。これからも4市は連携を深め、今年は11月に名古屋市で行われる国際会議、「生物多様性条約締結国際会議COP10」に向けて、協働して各々の活動の現状報告を行い、生物多様性への共通認識の共有化を図り、また実施への行動が始まり、次年度には、周南市より二回り目の協同開催の運びが決まりました。新しい視点からの再出発には大きな期待をすると共に、私達も出来る限りの精進を続けなければならないと思います。



移送・放鳥事業



「生き物と人共生の里シンポジウム」出水市にて

三点目には、移入事業の放鳥による増羽意識が先行している様にもみえますが、自然増羽に向かったの行動を、着実に実行すべきときだと思ひ、地元では、旧来からあるねぐらの環境改善に向けて行動しつつあります。国と県の援助で買い上げ、市が管理しているねぐらの周囲は、殆どが私有地であります。そこには、造林がなされた処とか、自然的に森林化された場所ばかりで、10米以上の立木がそびえ、大型野鳥の「ツル」にはだんだん利用しづらくなって来ています。そこで地権者の方々のご理解とご協力を戴きながら、ねぐら周囲の立木の伐採等を行い、環境整備を続けなければと思ひます。また地元保護団体と協働して継続し、餌場である田んぼには無農薬化を進め有機肥料化を図り、昭和40年代の飛来数の多かった時代に向かったの進化につとめる努力も地区民一体となって進め、どの圃場にも、「どじょう」や「田螺」のいる、自然に優しい、「ツルと人、共

生の里」の復元に向かって精進することが、自然増羽へ必ず繋がると信じています。そのことは、「トキ」の佐渡市や、「コウノトリ」の豊岡市での野生復帰への取り組みにも共通することでもあり、また、保護ゾルの移送事業に協力を戴いている出水市の方々へのお礼と共に、ツルへの恩返しではないでしょうか。

そして、この復元再生事業に深いご理解とご支援を戴き、巨額の経済的応援を頂戴しております、「旨いを明日へ」のプロジェクトで、大きな社会貢献をされております大手ビールメーカー様の熱意と、それを活用して下さる県民の皆様方へ、この機会を通じて、深く敬意と感謝の誠を捧げたいと思ひます。本当に有り難く十分に活用させて戴く所存でございます。

この様に、いろいろな活動報告等をつけながら築きあげて参りました30号の重みと、そして情報を発信し続けることの重大さを感じ、この広報誌の編纂に係わられました多くの方々に感謝と敬意の念を表すと共に、益々の精進に大きな期待をしているところであります。



復元後の大迫ねぐら全景



ツル放鳥特集



保護ツル放鳥から 北帰行まで

(保護ツル2羽の今後も含めて)

本年度の保護ツルの 放鳥について

昨年12月1日、7羽目となるP47の放鳥が行われました。この保護ツルの八代にやってきた時から、北帰行までの様子を簡単に紹介したいと思います。

～移送～

平成20年4月12日、他の3羽の保護ツルとともに出水市より移送されてきました。約450kmを6時間30分かけての移動です。この時移送された4羽の内1羽(P46)は、P47より1年前の平成20年12月1日に八代の空へ飛び立ちました。

～飼育中の様子～

米、ツルペレット、ワカサギ、ドジョウと何でも好き嫌い無く食べるツルです。夏の暑い日には、スプリンクラーの下で数時間水に当たるなどの行動を見せてくれました。このツルですが、飛行に必要な風切羽の一部に欠損があったため、移送1年目の放鳥は行われませんでした。

～換羽～

八代鶴保護センターでは初めてとなる風切羽の換羽(生え変わり)が確認されたのがP47です。ナベツ

ルを含めツル類の換羽は、いったいどのタイミングでどのように抜けるのかしっかりと記録がありませんでした。動物園などの例から、抜けることは分かっているものの不安もありました。

そのような中、P47換羽は突然やってきました。6月の下旬、飼育員さんから連絡を受け慌てて見に行ってみるとバラバラとすごい勢いで風切羽が落ちていました。なんと3日で全ての風切羽が抜け落ち、その後48日間かけて生え変わりました。

先にも書いたとおり、ツル類の換羽が分かっている部分が多くあったのですが、飼育員さんが落ちた風切羽を数回にわたって回収してくれたことで、換羽の様子を詳細に記録することができました。こうしたP47の記録は今後の飼育に大変参考になるものとなりました。



換羽後のP47

～放鳥～

換羽が確認されたことで、P47を放鳥することが山口県の委員会において決定されました。放鳥の前に、標識リングの取り付け、オープンケージでの馴化を経て、12月1日より放鳥作業が開始されました。